

近代日中企業家間における事業展開と公益活動

— 渋沢栄一と王一亭を中心に —

The Modern Sino-Japanese Relationship as Seen in the Business Development and
Charity Activity: Focus on SHIBUSAWA Eiichi and WANG Yiting

新潟大学経済学部 准教授 武藤 秀太郎

Faculty of economics, Niigata University MUTO Shutaro

本研究の目的

本研究は、日清戦争後の 20 世紀前半にみられた日中企業家の両国にまたがる事業展開と、文化芸術や自然災害に関わる公益活動の実態を明らかにすることを目的としている。とくに、本テーマを体現した代表的企業家として、日本の渋沢栄一(1840-1931)と中国の王一亭(1867-1938)に着目し、両者を中心とした日中の経済・文化的提携、災害などの相互支援関係を考察した。

東京都墨田区の JR 両国駅前にたちならぶ両国国技館と江戸東京博物館を北方にぬけた先に、台形型をした敷地面積約 2 万平方メートルの横綱町公園がある。横綱町公園の正門から入ると、目の前にそびえる建物が、東京都慰霊堂である。ここはもともと、陸軍被服廠の跡地であった。これを東京市が買収し、公園の造営をすすめていた最中の 1923 年 9 月 1 日昼、大地震が発生した。

被災した附近の住民らは、地震で発生した火の手からのがれようと、この公園予定地に殺到した。だが、無情にも火の粉が、避難民のもちだした布団や家財道具へと燃え移り、すし詰め状態となった現場は、火災旋風で高温の炎につつまれた。これにより 3 万 8000 人もの命が犠牲となったのである。関東大震災全体の犠牲者が約 10 万 5000 人であり、¹その 4 割ちかくを占めた計算となる。

震災から 1 年後、甚大な被害がでたこの地で、東京府市合同による震災歿死者 1 周年祭がいとなまれた。7 周年となる 1930 年 9 月 1 日には、震災遭難者の遺骨を納めた震災記念堂が設置され、横綱町公園として開園した。震災記念堂はその後、1945 年 3 月 10 日の東京大空襲による遭難者を合葬し、東京都慰霊堂と名称を改め、今日に至っている。



写真 1 幽冥鐘にみえる王一亭の銘文 (著者撮影)

¹ 中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会編『1923 関東大震災報告書』第 1 編、2006 年、2 頁。

東京都慰霊堂の本堂は、伊藤忠太が設計したもので、その奥に遺骨を納めた三重塔を配置するなど、寺社を彷彿させる外観となっている。これに付属する形で、本堂に通じる参道のわきに鐘楼がある。鐘楼に安置された鐘、「幽冥鐘」は、関東大震災の犠牲者を追悼するために、中国仏教徒から寄贈されたもので、その一連の事業に際し、上海出身の実業家



写真 2 2016 年 9 月 1 日正午に打鐘される幽冥鐘

(著者撮影)

であった王一亭による「特段のご尽力」があったことが、鐘楼前に設置された解説板に明記されている。幽冥鐘にかたどられた銘文(写真 1)の作者も、王震(王一亭)であり、「願成仏度衆生」「普聞鐘声 冥陽両利」など、死者の冥福を祈る字句がみえる。現在でも、日本に在住する王一亭の親族が、毎年 9 月 1 日の 12 時に幽冥鐘を打鐘し、祈りを捧げている(写真 2)。王一亭はそもそも、いかなる経緯から、中国人として関東大震災に哀悼の意を表そうとしたのであろうか。

この王一亭が関東大震災でのこした足跡は、20 世紀以来緊密化した日中両国の経済関係を象徴的に体現するものであったと考えられる。王一亭は、日本企業の買弁(comprador)として一代で巨万の富をきずきあげた。その輝かしい経歴も、日清戦争後にみられた日中経済の新たな結びつきを考慮することなしには、理解できない。

また、王一亭がたずさわった事業をみてゆくと、「日本資本主義の父」と目される日本の渋沢栄一が深く関わっていることがわかる。渋沢と中国をめぐっては、さまざまな観点から実に多くの先行研究があるが、王一亭との関係に言及したものは、日中両国ともにみあたらない。近年、近代日中を代表する企業家として、渋沢栄一と張謇をとりあげ、両者の儒学思想を中心に、比較検討した国際研究がある。²ただ、私見では、もともと科擧の最高位にあたる状元で、辛亥革命後も政府の要職を歴任した張謇よりも、一貫して上海に拠点を置く、たたきあげの企業家であった王一亭の方が、渋沢の比較対象としてふさわしいと考える。

本研究では、以上のような観点から、渋沢を導きの糸としつつ、王一亭が幽冥鐘を日本へ寄贈するにいたった経緯、ひいてはその背後にあった日中の経済関係を明らかにした。その上で、王一亭が日本に関心をよせ、積極的に公益活動をおこなった思想的背景を探った。

² 陶徳民・姜克實・見城悌治・桐原健真編『近代東アジアの経済倫理とその実践—渋沢栄一と張謇を中心に』日本経済評論社、2009 年；周見『張謇と渋沢栄一—近代中日企業家の比較研究』日本経済評論社、2010 年。

実業家としての王一亭

1907年3月25日、日清汽船株式会社の創立総会が、東京有楽町の日本郵船会社社屋でおこなわれた。日清汽船は、その定款に「清国の内河沿海並に之に関連する航路に於て水運業を営むを目的とす」とあるように、中国における海運、とくに上海、杭州、蘇州、漢口、宜昌、湘潭など長江の本支流、および周辺の都市を結ぶ航路の運行を主眼としていた。³日清汽船の設立母体となったのは、日本郵船、大阪商船、大東汽船、湖南汽船の4社で、湖南汽船の取締役であった洪沢栄一が、創立委員長を務めた。⁴洪沢は、創立総会で取締役の1人にも選出されている。

日清汽船は、大阪商船から出資をうけた上海外灘、および浦東の事務所、倉庫などの設備をもとに、上海支店を設立した。この中国の拠点たる上海支店の買弁となったのが、王一亭であった。王はもともと、大阪商船の買弁を務めていた。⁵王の人となりについて、のちに大阪商船社長となった林安繁は、こう語っていた。

上海支店では王震（号一亭）を傭ひ入れた。王は当時資産は無かつたが、人物が善かつたために選定されたのであらう。…当年の王一亭も後には大金持になり、上海に於て相当の羽振を利かせ、有名なる呉昌碩の高弟として、丹青界にも名声を馳せ、一方仏教経文の研究をも試み、日本最良の実業家として重きを為したのである…⁶

呉昌碩は、「中国最後の文人」とも目される芸術家であった。呉を師とし、自らも書画をたしなんだ王一亭の作品は、日本でも高く評価された。また、母方の祖母が熱心な仏教徒であった王は、数え年50歳となった1916年、正式に仏門へ帰依し、居士となっている。

ここで日本企業の買弁となるまでの王一亭の生い立ちについて、簡単にみてゆきたい。王は1867年12月4日、現在の上海市に生をうけた。王一亭の実父である王馥棠は、太平天国の乱により郷里の浙江湖州から上海の周浦鎮へと逃れた後、当地の名士であった蔣紫雲が営む商店で働いた。そこでの勤務態度がみとめられ、蔣の一人娘と結婚し、授かったのが王一亭である。

仏教を信仰した祖母のもとで育てられた王は、幼少時より書画に関心を示し、6歳から私塾に通うなど、英才教育をほどこされた。とはいえ、王の家庭は決して裕福で

³ 浅井誠一編『日清汽船株式会社三十年史及追補』日清汽船、1941年、299頁。

⁴ 洪沢青淵記念財団竜門社編『洪沢栄一伝記資料』第8巻、洪沢栄一伝記資料刊行会、1955-71年、286-7頁。

⁵ 沈文泉『海上奇人王一亭』中国社会科学出版社、2011年、32-3頁。

⁶ 林安繁「故文堂堀啓次郎翁の面影」高梨光司編『堀啓次郎翁追懐録』堀啓次郎翁追懐録編纂会、1949年、240頁。

なく、13歳となった1880年から上海の怡春堂という書画を表装する店で、見習いとして働きはじめた。こうした若き日の経歴が、のちに書画をたしなむバックボーンとなったといえる。

1881年、李也亭が営む伝統的な金融組織である錢庄へと転職した王一亭は、李から信任を受け、海運業の経営などにも携わった。これが、王にとって1つの大きな転機となる。海運業で実績をつんだ王は、その手腕を買われ、1902年1月に上海支店を設立した大阪商船の買弁となり、一実業家としての生涯を歩むこととなるのである。

渋沢栄一は1913年2月、来日した孫文と協議し、日中合弁で中国内地の開発をおこなう興業会社の設立をとりきめた。⁷この事業は結局、孫文に代わり中華民国大総統となった袁世凱がおしすすめてゆくことになるが、王一亭も当初、中国側の大株主、および役員の人1人に名をつらねていた。⁸王は、上海商総会の協理や上海商団公会の副会長を務めるなど、上海実業界の中心的存在であった。

渋沢栄一と王一亭は、実業のほか文化交流面においても、協力関係にあった。その代表例が1920年4月、上海で創立された中日美術協会である。王は顧問、渋沢は特別会員として、協会が日中両国で開催した日華（中日）連合絵画展覧会をサポートしたのである。⁹

王一亭と関東大震災

関東大震災の発生前、日本の対華21カ条要求にもりこまれた旅順・大連の租借期限延長を無効とし、1923年3月で満期になったとする旅大回収運動がおこり、中国各地でデモや日本製品ボイコット（日貨排斥）が展開された。6月1日には、長沙で日本海軍が上陸し、運動を鎮圧する事態となり、中国人の死傷者が出ていた（長沙事件）。そうした中、9月1日に関東大震災がおこると、王はすぐに有志らとともに、上海の各種団体を糾合し、「中国協済日災義賑会」を結成した。¹⁰中国協済日災義賑会は、18万5000元の義捐金を集め、まず白米5950包、小麦粉2万包などの食料や薬品を購入し、招商局の汽船「新銘号」で日本へ送った。この新銘号が神戸港に着いたのは9月12日で、海外から届いた最初の救援物資であった。

中国協済日災義賑会の副会長を務めた王一亭は、さらに会長の朱葆三、およびもう1人の副会長であった盛竹書との連署で、北京政府各部院、および全国各地の役人ら

⁷ 渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一伝記資料』第38巻、571-3頁。

⁸ 「日支合弁新企画」『東京朝日新聞』1913年5月21日。

⁹ 鶴田武良「日華（中日）絵画聯合展覧会について 一近百年來中国絵画史研究 七」『美術研究』第383号、2004年8月、1-3頁。

¹⁰ 東京震災記念事業協会清算事務所編『被服廠跡 一東京震災記念事業協会事業報告』東京震災記念事業協会清算事務所、1932年、163頁。

に、震災への支援をよびかける電報を発信した。¹¹これも効果あってか、北京や天津、広州をはじめとした省市で、官民を問わず、日本への救援物資の輸送や義捐を募るための団体が続々と結成された。『申報』、『大公報』、『晨報』、『民国日報』に掲載された1923年9月期の記事を集計すると、震災チャリティーに関わった社会団体、機関、学校の数は122で、災害支援活動中にできた各種団体は、44にのぼるといふ。¹²王自身も呉昌碩らと展覧会を開き、自らの作品を販売して得た資金を義捐金にあてていた。

こうした王一亭らによる日本への支援に対し、旅順・大連の返還に応じない日本を助けるべきでない、あるいは国内の厳しい経済事情を考慮すべきといった反発があった。その際、援助すべき理由としてもちだされたのが、日本が中国における過去の自然災害に対し、多大な支援をおこなったことであつた。たとえば、曹錕らが主催した直隸省日本震災救済会の設立会で、直隸省長の王孝伯は、こう義捐・救済の必要性を説いていた。

各国の対内・対外状況をみるに、慈善事業をおこなおうと、いずれも救済会を常設し、銀行にあらかじめ預金している。我が国は光復以来、天災・人災がひっきりなしで、自己を顧みる暇もなく、余力などなかった。救済会を準備することは、我が国春秋時代にあつた救災恤隣の義で、今回のような日本の奇禍に対し、我が中華民国の道義大国としての風格を示すために、さらに努力し工面しなければならない。いわんや、日本は我が中国で水害・旱害が起こるたび、いつも巨額の援助をしてくれた。礼尚往来で、救済に役立てるために、さらに積極的に資金を調達しなければならない。¹³

また、雑誌メディアでも、領土をめぐる日中間の問題と切り離して考えるべきとして、震災支援が次のように呼びかけられていた。

我が国と日本は同文同種である。われわれは人類互助の慈愛、救災恤隣の大義にもとづき、すみやかに救助にあたらねばならない。振り返れば5、6年前、我が国北部7省の災害、および浙江・温州の水害の際、日本は巨額の義捐金で救済してくれた。今、その国がこの絶大なる災禍を被っているのを、安穩と座視し、無関心でいられるだろうか。¹⁴

¹¹ 王中秀編『王一亭年譜長編』上海書画出版社、2010年、291頁。

¹² 李学智「1923年中国人対日本震災的賑救行動」『近代史研究』1998年第3期、1998年5月、287頁。

¹³ 「日災救済会之成立会」『益世報』1923年9月11日。

¹⁴ 巖千里「對於日本地震火災感言」『学生文藝叢刊』1923年第4号、18頁。

ここで挙げられている中国の災害とは、1915年6-8月に長江流域、および広東を襲った水害（乙卯水災）や1920年に中国北部で発生した旱魃飢饉であろう。たしかに、当時の記録をみると、日本が災害に同情し、支援の手をさしのべていたことが確認できる。その中でも熱心だったのが、中国に関係をもった実業家たち、とくに渋沢栄一であった。

渋沢栄一による中国への災害援助

水害にしばしば悩まされていた広東地方で、1915年夏に大洪水が襲った。珠江デルタで被害をうけた者は400万人近くにおよび、死傷者は1万人を超えたとされる。¹⁵これに対し、渋沢は大倉喜八郎や安田善三郎らにはたらきかけ、拠出した総額2万円を、広東総領事を通じ罹災者救済に寄付した。¹⁶この頃はちょうど、袁世凱が5月9日に受諾した対華21カ条要求に反発し、中国各地で日貨排斥運動が展開された時期であった。

1920年におこった大旱害は、山東、河南、山西、陝西、直隸といった中国北部各省で、約2000万人の被害、50万人の死者がでるなど、乙卯水災をはるかにしのぐ災害であった。¹⁷現地取材した日本の記者も、「農作物は平均一割位の収穫予想にて、地方に依つては収穫皆無の爲め、苜蓿や柳、榆の葉、綿の種を食しつゝある所もあり」と、その惨状を報じていた。¹⁸ここでも渋沢は、首相の原敬に政府所有の外米の払い下げを打診する一方、自らが会長を務めた日華実業協会で、財界人、および国民一般に義捐金を募った。義捐金の総計は、三井八郎右衛門と岩崎久弥がそれぞれ4万5千円を寄付したのをはじめ、64万4千円あまりに達した。¹⁹

この義捐金は、被災者への施粥や物資、医療、被災児童の収容所などに用いられた。このうち、北京の朝陽門外に設けられた北京災童収容所の運営を担った1人が、日本組合教会の宣教師であった清水安三であった。²⁰1917年6月に中国へ渡り、瀋陽の教会を拠点に1年半あまり活動した清水は、北京に移動し、中国語学習のかたわら、五四運動前後における現地の情勢を逐次日本の新聞・雑誌に発表した。ちょうど旱害にみまわれた1920年8月下旬頃、清水は中国を訪れたキリスト教社会運動家の賀川豊

¹⁵ 広東省地方史誌編纂委員会編『広東省誌—水利誌』広東人民出版社、1995年、110-7頁。

¹⁶ 渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一伝記資料』第40巻、5-10頁。

¹⁷ 廖建林「1920年北方五省大旱災及賑災述論」『咸寧学院学報』2004年第4期、66頁。

¹⁸ 「北支飢饉実情」『東京朝日新聞』1920年10月10日。

¹⁹ 渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一伝記資料』第40巻、27-46頁。

²⁰ 清水が中国にわたり、教育、および救済事業に従事する経緯については、太田哲男『清水安三と中国』花伝社、2011年、第3、4章参照。

彦に会い、スラムで貧民救済活動にとりくむことを勧められたという。²¹また、清水によれば、彼は英米の宣教師たちのように、旱害の救済活動を始めたいとの思いから、渋沢に手紙を出し、援助を求めたとされる。これらの詳しい前後関係は分からないが、寄付金を有効に活用するために現地スタッフの必要性を感じていた渋沢と清水の思惑が、合致したといえよう。

清水は、日華実業協会の支援のもと、500名を収容する災童収容所を設け、所長として1921年3月10日から6月25日まで、延べ3万2537人の災害児童を世話した。²²そのうち、身寄りのない孤児の手に職をつけさせようと、23名を5年期限で日本へ送り出した。²³災童収容所の解散後、日華実業協会から300円の謝礼と、帝国教育会が集めた寄付金の剰余である200数十円をうけとった清水は、これを元手に崇貞学園を設立した。女性の自立を目指し、中国人、日本人、朝鮮人を別け隔てなく受け入れ、教育にあたった崇貞学園は、大原孫三郎などから援助をうけつつ、第2次大戦終結まで存続した。終戦後、日本に戻った清水は、賀川豊彦のあっせんで1946年6月、東京の町田に桜美林学園を創設している。

渋沢は、1917年夏秋に天津一帯で起こった水害に際しても、天津水害義助会を組織し、会長として実業家らに義捐金をよびかけ、計14万円を集めた。²⁴渋沢の中国に対する災害支援は、古くは1878年までさかのぼることができる。この前年からの不作により、中国北部で発生した飢饉に対し、渋沢は益田孝や岩崎弥太郎らとともに、新聞を通じ世間にうったえ、義捐金を募った。こうして集まった約3万円で、米・麦6200余石、および旧銅貨、洋銀を購入し、天津総督の李鴻章へ送っていた。²⁵

王一亭による日本への災害援助

他方、王一亭も、関東大震災直後にとどまらず、継続的に日本へ支援の手をさしのべた。杭州で鑄造され、1925年に東京市へ寄贈された「幽冥鐘」も、その1つの表れである。幽冥鐘は、ひとまず震災記念堂建設予定地の仮安置所におさめられたものの、資金の欠乏でそのままの状態が数年つづいた。これに対し、王は1928年春、5名の同志とともに日本美術協会展覧会に出品した書画8点を売却し、その収益を記念堂建設の基金へと寄付した。²⁶さらに、同年冬に東京で開かれた「唐宋元明名画展覧

²¹ 賀川豊彦の中国訪問については、浜田直也「孫文と賀川豊彦 —1920年の上海での会談をめぐって」『孫文研究』第30号、2001年7月、同「賀川豊彦」『孫文研究』第42号、2007年9月参照。

²² 日華実業協会編『北支那旱災救済事業報告』日華実業協会、1921年、1頁。

²³ 渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一伝記資料』第40巻、44-6頁；山崎朋子『朝陽門外の虹』岩波書店、2003年、90-1頁。

²⁴ 渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一伝記資料』第40巻、22-3頁。

²⁵ 渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一伝記資料』第25巻、707-14頁。

²⁶ 東京震災記念事業協会清算事務所編『被服廠跡』、77-8頁。

会」に際し、王が出展した 200 点の所蔵品が、東京市震災事業協会に寄贈された。²⁷現在の復興記念館にも、王が描き、寄贈した絵画が展示されている。こうして、幽冥鐘の鐘楼も完成し、横綱町公園開園から 1 カ月後の 1930 年 10 月 1 日、始鐘式がおこなわれたのである。

王一亭の関東大震災に対する献身的な行為をうけ、日本の美術界でもその恩に報いようとする動きがみられた。たとえば、1931 年夏に中国全土で、20 世紀最大ともいわれる大水害が発生した際、川合玉堂や横山大観をはじめとした画家たちが、作品を王に贈呈し、それらを上海日本人クラブの展覧会で販売した収益を、民国災害救済会に寄付した。²⁸当時、病床にあった渋沢も、郷誠之助らと中華民国水災同情会を設立し、会長としてラジオを通じ、義捐をよびかけた。²⁹さらに、これに返礼するように、王は 1934 年 11 月、京阪神を襲った室戸台風に対し、再び書画 52 点を贈り、その売上金を被災地救済にあてていた。³⁰

渋沢と王一亭は、それぞれ東京、上海を拠点とした実業界の領袖として、日中経済交流の一翼をになった。同時に、美術など両国の文化交流事業にも力をいれ、相手国が災害にみまわれた折には、リーダーシップを発揮し、積極的に援助活動をおこなった。横綱町公園の幽冥鐘は、そうした日中の共助精神を今に伝えるものといえるのである。

まとめにかえて

2011 年 3 月 11 日に、三陸沖を震源とするマグニチュード 9.0 の地震が発生した当時、私は留学先であった上海復旦大学にある光華楼というビルディングの 7 階にいた。その歴史学部の資料室で、3 月末の帰国をひかえ、文献収集などの作業にあたっていたのである。もちろん、上海で地震を直接感知することはなく、東京の実家からの電話で、はじめてその異常事態を知ったのであった。

実家の電話によれば、地震発生後、国内に何度かけてもつながらず、ためしに国外の私へかけたところ、1 回でつながったという。通話後、地震の情報を得るツールを何も持ちあわせていなかった私は、急いで宿舎へ戻ろうと、資料室の事務員にその旨伝え、中国のサイトでも緊急速報が流れたことを教えてくれた。

宿舎では、テレビが契約切れで視聴できなかったため、主な震災の情報源はインターネットとラジオであった。中国の大手動画サイトである優酷（Youku）網でも、私がアクセスした時にはすでに、特別番組を組み、リアルタイムで震災の様相を伝えていた。20 世紀最大の犠牲者を出したとされる 1976 年 7 月 28 日の唐山地震、2008 年

²⁷ 「王一亭氏所蔵の名画を寄贈」『東京朝日新聞』夕刊、1928 年 11 月 24 日。

²⁸ 「画壇の大家連 支那水災に起つ」『東京朝日新聞』夕刊、1931 年 9 月 12 日。

²⁹ 渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一伝記資料』第 40 巻、76-9 頁。

³⁰ 「王一亭氏の義挙」『日華学報』第 48 号、1934 年 12 月、48-9 頁。

5月12日の四川地震、2010年4月14日の青海地震など、中国は日本と同様の地震多発国であり、それだけ地震に対する関心も高い。東日本大震災の前日にあたる3月10日にも、雲南省西部で死者16名にのぼるマグニチュード5.8の地震が発生していた。

まだ、紙面の多くを東日本大震災関連の記事が占めていた3月16日、人民日報系の国際情報紙『環球時報』に、「日本に暖かい手をさしのべよう（讓我們向日本伸出温暖的手）」と題した意見広告が掲載された。大学教員、研究者、医者など100名の署名からなるこの意見広告では、一般市民の立場から未曾有の震災に遭遇した日本に、募金や国際的ボランティアなどを通じ、迅速で有効な支援をおこなうことが提起された。

自然災害は人類の道徳を越えたものである。また、自然災害に対する相互援助は、歴史的和解への一歩となりうる。2008年四川大地震の時、日本の救援活動と国民をあげての義捐が感動をよびおこしたことは、なお記憶に新しい。現在、日本の国難に際し、中国政府は重大な関心を表明し、中国の救援隊もいの一に災害現場へと向かった。だが、地震と津波がもたらした地獄のような凄惨な光景を目の当たりにし、原子力発電所が爆発した恐ろしいニュースを聞くにつれ、私たちは人類の生命が、自然と高テクノロジーの災害に脆弱で無力であることを身にしみて感じる。私たちは、個人としてもすぐに行動を起こし、日本の民衆とともに痛みを分かちあい、災難にうちかたねばならない。³¹

『環球時報』は、地震の半年前に起きた尖閣諸島中国漁船衝突事件で強硬的な意見を唱えるなど、中国政府を代弁する新聞として知られ、今回のような意見広告が載るのは異例といえる。のちの報道によれば、これを企画したのは、日本の中央大学教授で、中国の清華大学日本研究センター常務副主任を務める李廷江であったという。³²地震の翌日におこなわれた同研究センター主催の国際学術会議に、2名の日本人研究者が参加できなかったこともあり、李はメディアを通じ、連名で日本に声援を送ることを思いついた。希望者を募ったところ、第2、第3の「百人署名」ができるほどの反応があったとされる。

一切の国際支援を拒んだ唐山地震の時と異なり、四川地震では、中国政府は外国からの支援をうけいれた。なかでも、日本から派遣された国際緊急援助隊が活動する様子は、地元メディアで大きくとりあげられた。上の引用文にもみられるように、四川地震における日本の救援・義捐が、今回の東日本大震災で改めてクローズアップされ

³¹ 「讓我們向日本伸出温暖的手 -100名中国学者的唱議書」『環球時報』2011年3月16日。

³² 『中国青年報』2011年3月23日。

たのである。

東日本大震災で海外最多の義捐金が集まった台湾でも、1999年9月21日に台湾中部を襲ったいわゆる921大地震での日本の救援・義捐がくり返し喚起された。たとえば、馬英九総統夫妻や台湾のスターが参加し、日本への義捐金を募った特別番組「相信希望（希望を信じて）Fight & Smile」で、台中市長の胡志強は、921大地震で最もすばやい反応を示したのが日本であったと指摘し、この恩に報いることをうったえた。また、この番組の主催者の1つであった中華民国紅十字会（台湾赤十字）は、921地震の際に各国赤十字を通じて届けられた義捐金の8割が、日本からのものであったことを明かした。このように「礼尚往来」、すなわち以前にうけた礼に対し、同様の態度をもって相手に返礼するという形で、日本への救援がよびかけられたのである。

「王一亭はそもそも、いかなる経緯から、中国人として関東大震災に哀悼の意を表そうとしたのであろうか。」——本文の冒頭で提起したこの問いは、これまでの叙述で明らかになったかと思われるが、ここであらためて整理したい。

近代日中関係の大きな転機となった日清戦争後、日本は本格的に、中国大陸へと経済的進出をとげていった。とくに、下関条約にもとづき1896年7月、日清通商航海条約が締結され、中国内地の航行が全面的に開放されると、日本の企業が続々と、長江流域の航路へ参入した。こうして競争が激化する中、経営の合理化をはかろうと、渋沢のとりまとめにより4社が合併して生まれたのが、日清汽船であった。王一亭は、その日清汽船上海支店の買弁となり、富を築きあげた。

上海で地位と名声をえた王一亭は、辛亥革命後も日系企業が当地で事業展開する際の窓口役として活躍した。また、王一亭が幼少より親しんだ書画や仏教を中心に、日中間の文化交流を積極的に推進していった。そうした最中、関東大震災が発生すると、王一亭は率先してまっさきに、救援物資を日本へ送り届けるとともに、仏教徒として犠牲者を弔おうと、幽冥鐘を寄贈したのである。

このように、王一亭は日清戦争後における日中経済の結びつきを背景に、自らの役割をみだし、地歩を固めていったのが分かる。経済交流の進展は、低賃金労働者の流入など多くのあつれきを生じさせたが、他面で災害の相互支援のような共助精神を育んだ。こうした矛盾が象徴的な形であらわれたのが、まさに関東大震災であったといえる。

王一亭は仏教徒として、渋沢をはじめとした日本人らとも協力しつつ、各種アソシエーションを結成し、公益活動に従事した。これまで、渋沢と中国人の関係を論ずる際、「はじめに」でふれた張謇との比較研究のように、もっぱら儒教的な公益思想の共通性に関心が向けられてきた。だが、本稿で対象とした20世紀の第一四半世紀は、儒教だけでなく、さまざまな思想、宗教がからみあいつつ、日中間の共助組織が形成されていったのである。

[謝辞]

本研究の遂行にあたり、公益法人 JFE21 世紀財団「2015 年度 アジア歴史研究助成」の一方ならぬ支援をうけました。末筆ながら、心より感謝申し上げます。